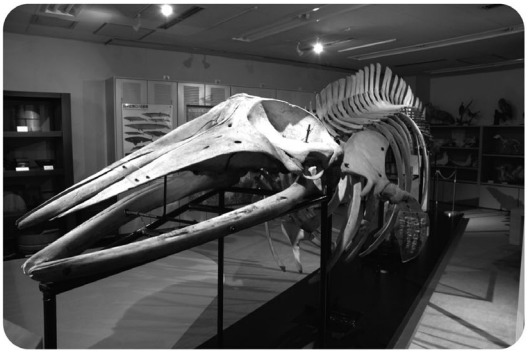
港区立　港郷土資料館

資料館だより

第60号

2007.9.30



さわれる展示室 リニューアルオープン！

クジラの骨にさわってみませんか？
縄文土器にさわったこと、ありますか？
ちょっと昔のくらし、体験してみませんか？

港郷土資料館では平成 19 年（2007）6 月 26 日、「さわれる展示室」をリニューアルオープンしました。

和洋折衷のレトロな民家をイメージした展示スペースで、羽釜（はがま）や火熨斗（ひのし）など、今では見られなくなった昔の生活道具を手に取ることができます。また、昭和初期に建てられた家で実際に使用していた美しいステンドグラスや電灯、そしてミシンや蓄音機なども展示しています。蓄音機から流れる音楽を聴きながら、欧米の生活に憧れて、家や道具の一部に西洋風のものを取り入れ始めたころの暮らしに思いを馳せてみませんか？

これまでどおり、縄文・弥生・古墳時代の土器や、江戸遺跡出土の動物骨などの考古資料、アジアゾウや全長 7ｍのミンククジラの骨格標本にもさわることができます。

ケースの中に展示されていると、見ることしかできない資料を〈さわって〉〈持って〉、質感や重量感を体験してみてください。今まで知らなかった何かを発見できるかもしれません。

〔さわれる展示室〕開室時間
火・水・金・土　午後 0 時 30 分～4 時 30 分

テーマ展 22

港区名所図会

平田 秀勝
（文化財保護調査員）

近年、六本木ヒルズや汐留シオサイト、今年度の特別展「東京ミッドタウン前史 赤坂檜町の三万年 旧石器～長州藩下屋敷～歩兵第一連隊」でも取り上げる東京ミッドタウンなど、港区内をはじめ東京には多くの人々が訪れる新たな名所が誕生し、連日、テレビや新聞、雑誌をにぎわせています。では、江戸時代・明治時代の江戸・東京にはどのような名所があり、人々の心を惹きつけたのでしょうか？今回のテーマ展22「港区名所図会（ずえ）」では、平成19年4月20日ー10月17日までの期間を5回にわけ、「その一　新橋・愛宕・虎ノ門」（4月20日ー5月16日）、「その二　増上寺・芝大神宮」（5月18日ー7月18日）、「その三　芝・三田」（7月20日ー8月15日）、「その四　芝浦・高輪・白金」（8月17日ー9月19日）、「その五　麻布・六本木・赤坂・青山」（9月21日ー10月17日）と題して『江戸名所図会』や『江戸砂子』、『東海道名所図会』、『新撰東京名所図会』などの地誌、江戸切絵図・明治東京区分図などの地図、平成18年度特別展「UKIYO-E―名所と版元―」では未公開の錦絵を中心に、現在の様子を写した写真などを交えて江戸から明治の港区の名所を紹介しています。

増上寺三解脱門

井上安治「芝増上寺」明治16年（1883）

増上寺の荘厳な大伽藍。芝浦・高輪の海岸からはるか房総半島の山々までも見渡すことができる愛宕山。広大な水面に蓮の花が咲き、鯉や鮒の遊ぶ風光明媚な赤坂溜池。金刀比羅宮や水天宮、魚籃（ぎょらん）観音堂などさまざまな御利益のある神社仏閣。傾斜や景観が独特の雰囲気をかもしだす坂道。文明開化の象徴ともいえる新橋停留所。黒煙をあげながら海上を力強く走る蒸気機関車。江戸から明治にいたるまで港区内には人々の心を惹きつける数多くの名所があったことがうかがえます。これらの名所のうち、今では失われてしまったものがある一方、当時の面影を残すもの、形を変えながらも現存するものも少なくありません。

この秋、文化財めぐりなどで史跡・旧跡を訪れる方もいることでしょう。その際、江戸・明治の名所を意識してみてはいかがでしょうか。意外と身近なところに江戸っ子・東京っ子たちを魅了した名所を発見することができるかもしれません。

見て・さわって・学ぼう！
夏休み事業報告

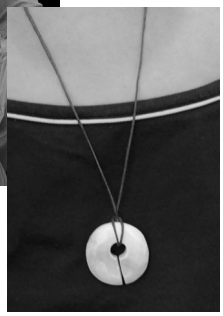
【夏休み体験ミュージアム】

平成19年８月２日､夏休み体験ミュージアム「チャレンジ！縄文時代のアクセサリーを作ろう」と題して、玦状耳飾りの制作体験が三田図書館の集会室で行われました。

玦状耳飾りとは、縄文時代のアクセサリーの一つで、平らな環状で一箇所に切れ目の入った形をしています。古代中国の「玦」という製品に形が似ていることから「玦状耳飾り」と呼ばれています。耳たぶに穴をあけ、切れ目から穴に差し込んで使ったと思われます。

今回は東京都埋蔵文化財センターから竹尾氏と並木氏を講師としてお招きし、軟らかい滑石を用い、砥石で玦状耳飾りの形に削っていきました。参加者は小学校１年生から中学校２年生までの36名、付き添いの保護者の方を含めると62名に及ぶ方たちが耳飾り作りに奮闘しました。

耳飾り作りの様子



できあがった耳飾りは紐をつけてペンダントとして使えるようにしました。

港区では、陸奥八戸藩南部家屋敷跡遺跡（六本木一丁目）からメノウ製の玦状耳飾りが２点発見されています。こちらは常設展示室で展示されていますので、是非ご覧ください。

（文化財保護調査員　杉本　絵美）

【夏休み学習会】

平成17年度より実施している東京海洋大学附属水産資料館との連携事業である夏休み学習会が、８月20・21日に開催されました。３回目となる今年は、東京海洋大学附属水産資料館の企画をもとに、小学校４年生から中学校１年生を対象として「東京湾の海の植物・海辺の植物」をテーマに、海の植物についてを東京海洋大学附属水産資料館が、海辺の植物についてを港郷土資料館が担当しました。

初日は東京水産大学附属水産資料館を会場にして、海の植物である「海藻」「海草」「珪藻」の３つの「藻類」について学習し、特に自分の力で動くことのできる植物である「珪藻」を光学顕微鏡や走査型電子顕微鏡で観察しました。顕微鏡が映しだすマイクロメートル(1000分の１mm）の世界を見ることは初めてであった参加者がほとんどで、貴重な体験となりました。また、「藻類」を使ってしおり作りを行いました。作品は乾燥し、加工した上で後日参加者に手渡されました。

２日目は本館を会場として、樹木医である杉崎光明氏を講師に、海辺の植物と私たちの暮らしとのかかわりを中心に学習しました。

二酸化炭素と植物の関係や海辺の厳しい環境の中でどのような生きる工夫を植物はしているかなど、実物を交えて解説していただきました。また、講師の企画でオヤツタイムを設定し、柿の種やピーナッツ、バームクーヘンなどを食べながら、植物の発芽の仕方や成長などを学び、楽しい時間を過ごしました。

２日間の参加者は、小・中学生29名と保護者17名でした。来年度以降も連携事業として継続していく予定です。

（学芸員　松本　健）

江戸の動物

－カワウソ－

山根 洋子
（文化財保護調査員）

2007年3月、東京都の羽村市動物公園でニホンカワウソとみられる剥製が発見された、という小さな記事が新聞に掲載されました。ニホンカワウソは国の特別天然記念物にも指定されている動物ですが、1979年に高知県の新荘川で目撃された後、公式には確認されていません。絶滅した可能性が高く、羽村市動物公園の剥製がニホンカワウソと断定できれば、大変貴重な資料となるのです。

このように、現在では姿を見ることができなくなってしまったカワウソですが、江戸市中の堀や川には生息しており、人々の目に触れることも少なからずあったようです。

東京の新しい名所である「東京ミッドタウン」（港区赤坂九丁目7番）が建つ場所は、江戸時代、萩藩毛利家の下屋敷として利用されていました。この場所は開発に伴い2002～03年にかけて発掘調査が行われ、毛利家の屋敷内にあった建物の跡や屋敷で使われた道具類が多数検出されています。出土遺物の中には、貝殻や動物の骨などの動物遺体も見られ、屋敷内での動物利用の一端を垣間見ることができました。その内容は食用となった魚や鳥の骨、飼育されていたと考えられるイヌの骨などで、他の江戸遺跡から出土する動物遺体の様相とさほど変わりがありませんでしたが、この中にカワウソの骨が3点含まれていたのです。

カワウソの骨は、前足の骨の一部（尺骨（しゃっこつ）2点、橈骨（とうこつ）1点）が見つかりました。出土した3点の骨は全てが同じ個体のものではなく、2個体分だと思われます。江戸遺跡では、汐留遺跡（港区）や三栄町遺跡（新宿区）においても、少数ですがカワウソの骨が確認されています。

さて、江戸の町に生息したカワウソは、人々の目にどのように映り、また、どのように利用されていたのでしょうか。

日本各地に「河童」伝承が残ることは、よく知られています。実は、この河童の正体がカワウソである可能性が高いらしいのです。水辺に住み、尾を支えにして後ろ足で立ち上がることができるカワウソは、頭が扁平で皿を乗せているようにも見えるため、「河童」と思われてしまうことがあったのでしょう。港区域でも、赤坂の紀伊国坂付近の堀に河童がいたという話が伝わっています。水辺の暗闇に立ち上がるカワウソを見た人が河童と思い込み、その噂が市中に広まっていったのではないでしょうか。

また、カワウソは江戸時代、食用にもされていました。江戸時代は肉食禁制であったと言われていますが、現在の千代田区平河町や墨田区両国辺りには「ももんじ屋」という獣肉を売る店がありました。『名産諸色往来』には、糀町のももんじ屋で扱っていた獣の種類が連ねられており、その中に「カワウソ」の名も見えます。ももんじ屋で扱う主な獣はイノシシやシカでしたが、カワウソの肉も食用として店先に並んでいたのです。さらに、江戸時代の料理書である『料理物語』にはカワウソの調理法として「貝焼」と「吸物」が挙げられています。江戸の人々にとってカワウソの肉を食することは、私たちが思うほど珍しいことではなかったのかもしれません。

カワウソは明治時代以降の水質汚染や毛皮目的の乱獲のため、今や姿を見ることはありません。萩藩毛利家の下屋敷跡から出土したカワウソの骨には解体などの痕跡はなく、食用となったものか、自然死したものかはわかりませんが、出土した骨は江戸の町が、人と動物が共存できる豊かな自然の残る土地であったことを物語っています。

東京ミッドタウン前史

長州藩邸没収事件

吉崎 雅規
（文化財保護調査員）

今年３月、赤坂９丁目にオープンした東京ミッドタウンは、東京一の高さを誇るミッドタウンタワーなど６つのビルと広い緑地からなる新しい街です。各種メディアに華々しく取り上げられ、連日多くの人を集めています。

江戸時代、この敷地には長州藩（山口県）毛利家が下屋敷（３万 3280 坪）を構えていました。屋敷内に檜（ひのき）の巨樹が立ち並んでいたことから「檜屋敷」の別称があり、明治時代にはいると一帯は「赤坂檜町」と町名がつけられ、歩兵第一連隊が駐屯します。

オープン１周年を迎える来年３月、港郷土資料館では変化に富んだこの土地の歴史をふりかえって、特別展「赤坂檜町の三万年」を開催します。今回は展覧会の予告編として、三万年で一番劇的だったできごと―長州藩邸没収事件―を紹介します。

元治元年（1864）７月 26 日未明、老中水野忠精（ただきよ）は長州藩の家老・留守居（るすい）役を江戸城に呼び出します。家老代理波多野藤兵衛・留守居遠藤太市郎が出頭すると、水野は桜田の上屋敷と麻布の下屋敷（檜屋敷）を没収するという命令を伝えました。

ようやく日が明けたころ、庄内藩（山形県）の兵に囲まれて、波多野は檜屋敷にもどります。善後策を協議しているうちに、諸藩の兵は次第に門の外に集結し、野戦砲も数十門引き出されました。幕府の歩兵隊や山家藩（滋賀県）・宇和島藩（愛媛県）等の兵は北隣の松江藩（島根県）屋敷に陣取り、檜屋敷のあたりには一触即発の空気が流れます。

この８日前の 18 日夜、長州藩の過激派は兵を率いて上洛、薩摩・会津藩など京都を守る諸藩の兵と交戦しました（「禁門の変」）。事件は江戸に伝わって、幕府は長州藩追討を布告するとともに、江戸屋敷の没収を命じたのです。この土地の歴史のなかでもっとも緊張感のみなぎった一瞬でした。

夜になって波多野らは屋敷に残っていた人員を邸内の寺・圓明院に集め、幕府側の督促を容れて屋敷を引き渡すことに決しました。長州藩士たちは拘束され、一時的に桜田上屋敷の空地に移送されます。このとき腰の刀を取られることを無念に思った足軽２人が立ったままのどを突いて自殺するという悲劇もありました。屋敷内の穴蔵に隠れ潜んだ者もいましたが、５、６日後「空腹にてひよろひよろ」出てきたところを召し捕られます。藩士たち 136 人は８月４日に神田橋門外にあった旧陸軍所の建物に移され、２年間で 51 人が獄死するという過酷な獄中生活を送ることになります。

檜屋敷は８月８日から 5000 人の鳶（とび）人足によって徹底的に破却されます。文久２年（1862）６月に藩主毛利慶親が国元に帰って以来、人がほとんど住んでいなかった屋敷は荒れはじめていたものの、壮麗な御殿や 20 余りの土蔵が立ち並んでいました。人足たちは建具も取り払わないまま柱を大鋸で切り、大きい綱を柱に巻きつけて引っ張り、強引に建物を潰します。奥殿を壊すときには不思議なことがありました。この部屋に奇数の人数で入るときは必ず怪異があると伝えられていたので、人数を偶数にそろえて部屋に立ち入ったところ、大きな蝙蝠（こうもり）が飛び去ったのです。

屋敷地は火除（ひよけ）空地として宇和島藩と蓮池藩（佐賀県）に預けられたあと、幕府勘定所の管理するところとなり明治維新を迎えました。東京ミッドタウンの敷地に刻まれている劇的な歴史のひとこまです。

なるほどッ！　考古学

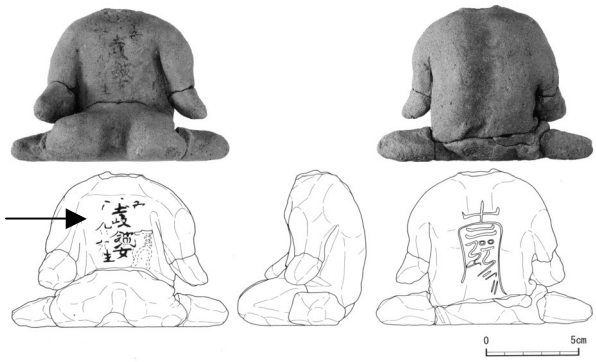
(3) 土地の拝領者に関連する資料

毎田 佳奈子
（文化財保護調査員）

江戸時代に遡って土地の拝領者を知りたい時、多くの人がまず手に取るのは絵図だと思いますが、その拝領者につながる考古学的な資料が発掘調査で出土することがあります。大名屋敷跡を例に見ていくことにしましょう。

まず見た目にも分かりやすい家紋入りの資料です。出土例が多いものでは瓦が挙げられます。例えば筑前福岡藩（現：福岡県）黒田家の屋敷跡では、家紋である「藤巴文（ふじともえ）」の入った軒丸瓦が出土しました。「桔梗文（ききょう）」を家紋とする上野沼田藩（現：群馬県）土岐家の屋敷跡では、やはり家紋の入った鬼瓦や軒丸瓦が確認されています。播磨赤穂藩（現：兵庫県）森家の屋敷跡では家紋「十文字文」の入った軒丸瓦が出土しており、そこではさらに「赤穂」の刻印も確認されています。そもそも大名は各家毎に複数の家紋を所有し、屋敷の外壁や主要な建物の正面に家紋入りの瓦を配していました。この他、家紋入り資料としては漆碗やお化粧用具等が知られています。

資料に残された文字（墨書・朱書）に拝領者の名前を読み取ることができる場合もあります。沼田藩土岐家の屋敷跡では「…土岐（飯）女…」と朱書された土製人形が、整地層中から発見されました。上述の家紋瓦とともに、この地拝領者が土岐家であったことを物語っています。また陸奥仙台藩[現：宮城県]伊達家・播磨龍野藩[現：兵庫県]脇坂家・陸奥会津藩[現：福島県]保科家が堀を境に隣接していた汐留遺跡では、各屋敷跡から各々の拝領者を示す墨書が発見されました。例を挙げると、仙台藩伊達家の屋敷跡では「仙臺家中　佐藤玄藩」墨書のある荷札が、龍野藩脇坂家の屋敷跡では「脇坂淡路守」の墨書のある木簡が、会津藩保科家の屋敷跡では「保科筑前守様之内…」墨書のある荷札が出土しています。このような資料に残された墨書や朱書は、家紋と同様に土地の拝領者の名を語ってくれます。



朱書のある土製人形（沼田藩土岐家屋敷跡）

こうした家紋入り資料や墨書・朱書以外にも拝領者との関連を示す資料が出土することがあります。それは拝領者の国元で生産された焼物です。長門萩藩（現：山口県）毛利家屋敷跡では国元の焼物である萩焼が纏まって発見されました。江戸において萩焼の碗は決して珍しくはありませんが、壺・瓶・鬢盥（びんだらい）・土瓶等の出土は萩藩の屋敷ならではといえます。また石見津和野藩（現：島根県）亀井家の屋敷跡では石州瓦が出土しています。明るい茶褐色の釉薬が掛かった瓦で、現在の島根県周辺でも目にすることができます。とはいえ灰色の江戸瓦が主体の江戸では、特殊な出土遺物です。こうした焼物はその遺跡の出土遺物を特徴付けています。

このように発掘調査を行うと、資料に残された家紋や文字、拝領者の国元で焼かれた焼物等の、土地の拝領者に関連する様々な資料を得ることができます。このような資料は、絵図に記された拝領者がその地にいたことを裏付ける貴重な資料といえます。

建物めぐりの楽しみ方

ステンドグラス

川上 悠介
（文化財保護調査員）

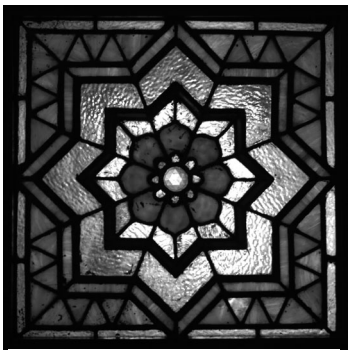
ステンドグラスは、色ガラスを組み合わせて、さまざまなデザインを施した装飾用のガラスで、建物を鮮やかに彩る建築部材の一種です。港区内には明治時代に建てられた建物が幾つか現存しますが、その中には当時の日本で作られたステンドグラスを使用している建物もあります。

明治時代中頃の日本には、ステンドグラスどころか、建築用の薄い板ガラスを制作する技術すらありませんでした。建築用板ガラスは輸入品に頼っており、その中には色ガラスも含まれていました。日本各地に残る明治時代初期の建物には、輸入された色ガラスを取り入れたものが数多くあります。港区内では、明治学院インブリー館（明治21年頃）の窓に色ガラスが使われています。

国内のステンドグラス制作は、明治23年（1890）にドイツから帰国する宇野澤辰雄によって始められます。宇野澤は、国の命によって技術者として留学しました。帰国後の明治中頃に、数件の作品を制作し、明治39年に、宇野澤の義父宇野澤辰美により、「宇野澤ステンド硝子製作所」が旧芝区芝新銭座町（現 浜松町一丁目）で設立されます。また、宇野澤に続いて、明治44年に10年間のアメリカ留学を終えた小川三知が代々木に「小川三知工房」を設立します。宇野澤は小川の帰国した年に亡くなり、海外でステンドグラスの技術を学んだ二人が出会うことは一度もありませんでした。しかし、その技術は、それぞれの弟子たちに継承され、日本のステンドグラス制作の礎を築き上げていきます。

この二人の作品は港区内でも見ることができます。宇野澤が手掛けたステンドグラスは、三菱開東閣（明治29年）、赤坂離宮（明治42年）、高輪プリンスホテル貴賓館（旧竹田宮邸 明治44年）などにあります。一方、小川の作品は安藤記念教会（大正6年）で見られます。慶應義塾大学旧図書館（明治44年）にあるステンドグラスも、オリジナルは、和田英作の原画から小川が制作した作品でしたが、戦災で破壊されました。現在、図書館で使用されている作品は、昭和49年(1974)に原図から復元されたものです。

さて、このようにあまり目にする機会がない小川の作品ですが、リニューアルされた本館の「さわれる展示室」では、2種類の作品をご覧いただくことができます。昭和63年まで三田2丁目にあった、旧蜂須賀正韶（まさあき）邸（昭和3年）の窓と天井部分で使われていたと考えられるステンドグラスです。2種類ともヨーロッパのステンドグラスなどと比べると、色使いが淡いことが特徴です。これは、日本人好みの色合いが採用されただけではなく、建物に差し込む光の強さや明るさがアメリカやヨーロッパとは異なることも影響したと思われ、同じ頃に日本で制作された他のステンドグラスにも同様の特徴を見ることができます。



旧蜂須賀邸で使われていたステンドグラス

歴史的な建物とともに、戦前期に制作された多くのステンドグラスは消失してしまいました。しかし、港区内には少数ではありますが、教会堂や住宅に明治～昭和時代初期に作られたステンドグラスが残されています。教会堂などを訪れる機会がありましたら、ステンドグラスの美しいデザインや色彩のバランスに目を止めてみてください。古い建物の魅力を再発見できると思います。

（参考文献：伝統技法研究会『日本のステンドグラス その歴史と魅力』、増田彰久・藤森照信『日本のステンドグラス 彩色玻璃コレクション』）

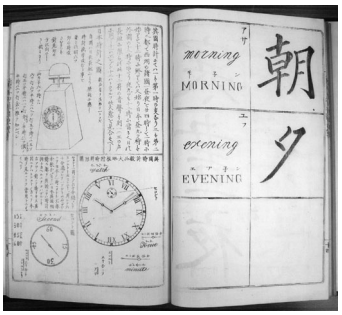
行事のご案内

テーマ展「港区名所図会」

～10 月 17 日（水）

テーマ展「平成 18 年度　新収蔵資料展」

10 月 19 日（金）～平成 20 年２月 23 日（土）



「商貼外和通韻便宝」

コーナー展「寄贈資料展　－暮らしの道具－」

～12 月 14 日（金）

コーナー展「平成 19 年度指定文化財展」

12 月 15 日（土）～平成 20 年１月 16 日（水）

コーナー展「発掘速報展」

平成 20 年１月 18 日（金）～２月 23 日（土）

・平成 19 年 10 月から 12 月（予定）まで、エレベーター取り替え工事を行うため、期間中エレベーターのご利用ができません。なお、工事にともない前号でお知らせした特別展の開催期間が変更となっています。
・平成 20 年２月 25（月）～３月 10 日（月）まで、特別展準備のため休館します。

特別展予告

東京ミッドタウン前史

赤坂檜町の三万年

旧石器～長州藩下屋敷～歩兵第一連隊

平成 20 年３月 11 日(火)～4 月 13 日(日)

長州藩下屋敷の玄関に掲げられていた紋型（山口県立山口博物館蔵）

東京の新しい名所として連日多くの人を集めている東京ミッドタウン。この敷地－防衛庁跡地－には江戸時代、長州藩毛利家の下屋敷が置かれ、明治に入ってからは陸軍歩兵第一連隊が駐屯していました。本展覧会ではミッドタウン建設に先立っておこなわれた発掘調査の出土品もまじえながら、文献・絵画資料を諸機関よりお借りしてこの土地の３万年におよぶ歴史を紹介します。どうぞご期待ください。

行事報告（平成 19 年３月～９月）

① 平成 17 年度　新収蔵資料展（平成 18 年 12 月 16 日～平成 19 年４月 18 日）
② 発掘速報展－平成 17・18 年度の調査－（３月 16 日～６月９日）
③ コーナー展　江戸図屏風（６月 26 日～８月 15 日）
④ 写真展　－アメリカ軍が見た戦後の風景－（８月 17 日～９月 14 日）
⑤ 親子学習会「港区たてものウォッチング　～お寺や洋館をたずねてみよう～」（６月２日・６月９日）
⑥ 古文書教室「古文書を読もう」（初・中級）（６月 26 日～７月 27 日　全５回）
⑦ 夏休み体験ミュージアム　チャレンジ！縄文時代のアクセサリーを作ろう（８月２日）
⑧ 夏休み学習会　東京湾の海の植物・海辺の植物　港郷土資料館・東京海洋大学水産資料館共催事業（８月 20 日・21 日）

港区立港郷土資料館の利用案内

交通　JR 田町駅より徒歩５分
都営地下鉄三田線・浅草線
三田駅より徒歩２分

開館時間　9：00～17：00

休館日　日曜祝祭日・第３木曜日
年末年始・特別整理期間

入場料　無料

『資料館だより』60 号
平成 19 年（2007）９月 30 日発行
編集・発行　港区立港郷土資料館
〒108-0014　東京都港区芝 5-28-4
Tel03(3452)4966　Fax03(5476)6369
ホームページ
http://www.lib.city.minato.tokyo.jp/muse

R100 古紙配合率100% 再生紙を使用。
刊行物発行番号
19073-7541